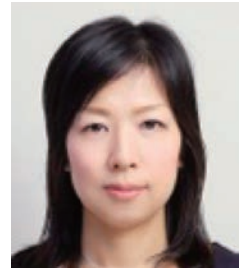


文化・娯楽・スポーツと女性： 変革を迫られるサウジの社会・文化規範



東京大学 特任准教授 辻上 奈美江

.....

サウジアラビアで今、文化・娯楽・スポーツが促進され、これまで宗教的に好ましくないとされてきたことが、政府主導で奨励されている。2017年2～3月にリヤドで実施した現地調査を踏まえ、本稿では、サウジ政府が推進する文化・娯楽・スポーツと社会・文化規範の転換との関係を明らかにしていく。

補助金・給料カットのインパクト

2014年の石油価格下落以降、サウジ政府は政策転換を迫られた。2016年初頭までにはガソリンや電気、水などの公共料金を値上げし、2016年4月に2030年に向けた展望「ビジョン2030」、6月には同展望実現のために省庁の業績目標を示した「国家変革計画」をそれぞれ発表した。これらに基づいて9月には公務員の給料や賞与の削減を決定し、10月には公務員の昇給を停止、賞与や残業手当、危険手当などの追加的な支払いも停止した。大臣の給料は20%削減、諮問評議会議員の住居手当や車両手当も15%削減された。これに加えて、公務員の給料の支払いがこれまでのヒジュラ暦（イスラーム暦）から西暦になった。西暦はヒジュラ暦より1年が約11日長い。暦の変更により、11日分の給料相当額（3%程度）が追加的に削減されることになる。

消費意欲の低減がはっきりしたのもちょうどこの頃だった。2016年10月の非石油部門のPMI（購買担当者景気指数）は、かろうじてプラスを示すだけの値（53.2）へと下落し、2009年以降では最低水準に落ち込んだ⁽¹⁾。同指数は2017年1月には前年8月のレベルへと回復したとはいえ、2018年以降の5%の付加価値税の導入や、さらなるガソリン・光熱費の値上げも決定しており、人びとの可処分所得は継続的な縮小を迫られている。実際にお菓子の製造販売を行うサウジ人女性起業家は、給料削減が決定されて以降、売り上げは大きく落ち込んだと語った。売上下落幅は20%を優に超えるというから、嗜好品の消費には給料削減額以上のブレーキがかかっていると考えられる。

(1) “Saudi Non-Oil Business Growth Hits Record Low in October : PMI”, *Reuters*, Nov 3, 2016. <http://www.reuters.com/article/us-saudi-economy-pmi-idUSKBN12Y097?il=0>（最終閲覧日：2017年3月8日）



各地に掲げられる「ビジョン2030」のロゴ
(2017年3月、リヤドにて筆者撮影)

広がる公共空間と男女隔離の緩和

給料や手当を削減する一方で、サウジ政府は、国民の娯楽の需要に応え、国内消費を刺激するためとして、文化・娯楽・スポーツ関連のイベントの開催を促進しはじめた。「ビジョン2030」では、文化・娯楽活動は国民の生活の質の向上に欠かせないと明記され、2030年までに家計による文化・娯楽活動関連の支出を2.9%から6%に引き上げることが目指されている。ビジョンに基づいて娯楽庁が設置されると、さまざまな娯楽・文化・スポーツ関連の行事が開催されるようになった。これまで宗教界が邪悪なものとして位置付けてきたこれらの活動が、今や政府の承認や支援を受けて行われるようになり、公共空間を拡大していることの意義は大きい。

実際に、これまで国外に流出していた資金を国内に還流させる余地はありそうだ。本センターニュース2016年11月号に掲載された拙稿「[英国政府の湾岸人観光招致と女性の消費](#)」では、2015年に11万人を超えるサウジ人が英国を訪問し、彼らの一回の英国渡航に際する一人当たり支出は4,300ポンドを超えていることを紹介した。英国政府は、サウジ人観光客を「ハイエンド層」と位置付け、富裕層の若者向けのアトラクションやエンターテイメントを中心に広報活動を精力的に行っていたのである。

娯楽庁はイベント企画会社にライセンスを付与する役割を帯びており、ロタナやタイム・エンターテイメントなどの会社は早くもライセンスを得て文化・娯楽イベントを開催して

いる。ジェッダでは1月末にサウジを代表する歌手ムハンマド・アブドゥやラービフ・サグルなどが出演する音楽コンサートが開催された。これまでサウジでは公共空間での音楽や映画に対する宗教界の反発があり、公開コンサートはほとんど行われてこなかった⁽²⁾。このため、コンサートは非公開のイベントや有力者の結婚式など私的な空間で行われるのが一般的だった。1月にジェッダで行われたコンサートについても批判はあった。アブドゥ

ルアジーズ・アール＝シェイフ最高法官は、コンサートに先立って音楽や映画はモラルを腐敗させると述べていた。だが、オンラインで販売された公式チケットはもっとも安いものでも350リヤル（約10,000円）、もっとも高いものが2,000リヤル（約6万円）であったにもかかわらず完売し、8千人のファンが会場を埋め尽くしたと報じられている。観客が男性に限定されたことは宗教界への配慮と思われる。ユーチューブで確認する限り、コンサートでは国王、皇太子、副皇太子の肖像画と国旗がステージの前面に大きく映し出され、この娯楽イベントが国家の支援を得て進められていることが強調された。国家権力を前面に打ち出すことで、イベントに対する批判を喚起しない目的もあったのかもしれない。

さらにジェッダでは2月中旬にはじめてのサウジ版コミックコンが開催された。コミックコンでは、映画、漫画やゲームに関するさまざまなショーが行われる。アニメやゲーム好きが集結したが、なかにはコスプレで現れる者もいたようだ。

ジェッダのみならず、リヤドでもギャザリングと総称されるさまざまなイベントが開催されている。たとえば女子大学プリンセス・ヌーラ大学は2月、ロンドンのハイドパークで毎年冬に開催される遊園地「ワンダーランド」を学内のグラウンドで開催した。大学のグラウンドは遊園地と化し、サーカスなどのイベントもあったとされる。ユーチューブで確認する限り、子どもや大勢の若者で賑わったようである。筆者が同大学に滞在した2013年末には、部外者が立ち入れないように入構や学生の移動が厳しく管理されていたことを考えると、期間限定のイベントとはいえ、ずいぶん様変わりである⁽³⁾。

同じ時期、リヤド郊外のヌーフア・リゾートでは、乗馬場で写真展、絵画展、乗馬ショー

筆者紹介

2008年神戸大学大学院国際協力研究科博士後期課程修了。博士（学術）。日本学術振興会特別研究員、高知県立大学講師などを経て現職。

著書に『現代サウディアラビアのジェンダーと権力』（福村出版、2011年）、『イスラーム世界のジェンダー秩序』（明石出版、2014年）、共著に『中東政治学』（有斐閣、2012年）『中東イスラーム諸国民主化ハンドブック』（明石書店、2011年）『グローバル政治理論』（人文書院、2011年）、共訳に『中東・北アフリカにおけるジェンダー』（明石書店、2012年）『21世紀のサウジアラビア』（明石書店、2012年）など。

専門は中東地域の比較ジェンダー論および地域研究。

(2) 2016年9月にリヤドでムハンマド・アブドゥのコンサートが開催される見込みとなっていたが、キャンセルされた経緯がある。

(3) 2013年12月に筆者がプリンセス・ヌーラ大学を訪問・滞在した際には、部外者のみならず学生の学内の移動も厳しく管理されていた。辻上奈美江「[サウジアラビアにおける高等教育の拡大と女性の将来](#)」『中東協力センターニュース』2014年2/3月号、80-85。



ラマカの広告（2017年2月，リヤドのレストランにて筆者撮影）

など，馬好きのためのイベント「ラマカ」が開催された。一般人が空き時間と自家用車を使って他人を運ぶ自動車配車サービスを展開する会社「カリーム」は，ラマカを訪れる際に同社のサービスを利用すれば料金が半額になると，ラマカのインスタグラム・サイトに広告を掲載した。ウーバーやカリームの利用は若いサウジ人女性の間で急増しており，交通手段のない女性にも来場の機会を提供しようとしていることがわかる。

新規のイベントのみならず，既存のイベントにも変化の兆しが現れている。毎年恒例の国民の祭典ジャナドリーヤに参加すると，ゲスト国となったエジプト展の前で大音量の音楽と踊りが披露されていた。エジプト展内でも，アラブの撥弦楽器ウード奏者にあわせて歌が披露された。公共空間での音楽や踊りを否定してきたサウジの宗教観を覆すもののようにすら思われた。

これらの娯楽・文化イベントは，サウジ政府が「ビジョン2030」において目標としたとおりに国内の消費刺激に一役買っていると思われる。ムハンマド・アブドゥラのコンサートは，チケットは比較的高額であったにもかかわらず8千人が駆けつけたとされる。ジェッダのコミックコンのチケットは，3日間フルで当日購入すれば一人約400リヤル（12,000円）であった。参加者は2万人程度であったとされる⁽⁴⁾。リヤドのワンダーランド

(4) “Jeddah : Sci-fi Fans Flock to First Ever Comic Con Expo” *Al-Jazeera*, February 19, 2017. <http://www.aljazeera.com/indepth/inpictures/2017/02/jeddah-sci-fi-fans-flock-comic-con-expo-170219150013781.html>（最終閲覧日：2017年3月6日）



ジャナドリーヤは大勢の男女の客で賑わった
(2017年2月, ジャナドリーヤにて筆者撮影)

の入場料は150リヤル, ラマカの入場料は90リヤルだった。これらのイベントでは, ブースの出展者からも出展料を徴収していると考えられるため, イベント収入は少なくとも二方向から得ることができる。

これらのイベントのもうひとつの特徴は, 家族向けで外出型であることだ。ここで挙げたイベントのうちジェッダのコンサートのみが男性に限定されていたが, それ以外はすべて男女が同じ空間に集まった。娯楽庁への聞き取り調査でも, 家族全員で外出させることによって消費を刺激する目的があることがわかった。これまでに痴漢などの問題は起きていないとのことだが, 注目すべき点は, これまで維持されてきた男女隔離が緩和される方向へと向かっていることだろう。筆者はかつてサウジ社会を巨大な女子校と男子校と呼んだことがあった⁽⁵⁾。ほぼすべての教育課程で男女別学を採用し, 省庁にはかならず女性部門を別途設けてきたのは, 他ならぬサウジ政府であった。それを今, 財政的必要性という目的を掲げ, 娯楽という限定的な分野ではあるものの, サウジ政府自身が転換しようとしている。

(5) 辻上奈美江「サウジ社会は『巨大な男子校と女子校』。しなやかに生きる人々」*Newspicks*, 2016年2月24日付。

<https://newspicks.com/news/1412224/> (最終閲覧日: 2017年3月8日)

女性の肥満問題と健康増進

「ビジョン2030」の目指す社会変革のもうひとつの要であるスポーツについても、国民の健康増進のために女性にもスポーツを推奨するようになったという意味でジェンダー規範の変革を迫るものとなっている。

サウジでは小学校から男女別学となっているが、女子校のカリキュラムには体育教育が導入されないまま今日に至っている。サウジの教育分野には、長年、宗教界が強い影響力を持ってきた。とりわけ2002年に女子教育庁が教育省に組み込まれるまで、女子教育は宗教界の直接の指揮下にあった。サウジのイスラーム学者の多くは、女性は家に留まるのが良いとする見解を有してきたことから、女子教育のカリキュラムから体育が除外されてきたことは当然のように見なされてきた。

ところが2016年後半、スポーツ庁にはじめて女性部門が創設されて女性の副部門長が任命されたほか、諮問評議会の再編ではジェッダでスポーツ会社を経営する女性が任命されたことから、女性のスポーツに関する立法・行政が急速に動き始めたかのように思われたが、学校カリキュラムへの体育教育導入を含めた女性のスポーツ推進については、諮問評議会で遅くとも2014年頃には議論が行われていたようである⁽⁶⁾。この頃までには、アール＝シェイフ最高法官も女性がスポーツをすることを認める法学的見解を表明していた。筆者は、今回の現地調査で医療や保健行政に携わってきた女性議員複数名との面会の機会を得たが、議員らは、彼女らの働きかけで女性の医療や健康に関する法整備が進められたことを、誇りを持って紹介していた。

2017年2月に女性向けスポーツジムが承認されたことは、これらの成果のひとつだろう。リヤドでは、数年前から女性専用ジムが民間のカルチャーセンターやスパ内に設置されており、主に富裕層の会員を獲得してきた。女性専用ジムはなかば公然と運営されており、街中のスポーツ用品店でも女性向け商品の売場が急速に拡大している。リヤド中心部のショッピングモール内のスポーツ用品店では、男性向けスポーツウェアよりも女性向けウェアの販売により重点が置かれていることが、売り場のスペースの使い方や商品の配置から明らかだった。従来、スポーツ用品店が男性客向けに商品が展開されてきたことは対照的である。同店員も、女性のほうが購買意欲が強いと証言したほどである。

政府が女性専用スポーツジムの承認した背景には、女性に偏重する肥満の問題がある。

(6) スポーツ庁女性部門の副部門長には、バングラ元駐米大使の娘で起業家兼慈善活動家のリーマ・ビント・バングラ・アール＝サワードが任命された。諮問評議会議員の再編では、2006年にジェッダで初のスポーツ会社ジェッダ・ユナイテッドを設立し、女性と若者のスポーツ振興に携わってきたリーナ・アル＝ムアイナが任命されている。なお、2014年の諮問評議会での議論については“Saudi Arabia Moves to Allow Girls to Play Sports in School” *Al-Monitor*, April 9, 2014. <http://www.csmonitor.com/World/Latest-News-Wires/2014/0409/Saudi-Arabia-moves-to-allow-girls-to-play-sports-in-school> (最終閲覧日：2017年3月8日)

ごく最近になって、運動のために歩道でウォーキングをする女性や、スポーツジムに通う若い女性を見かけるようになったものの、筆者のこれまでの現地での経験からも、運動をする習慣のあるサウジ人女性はあまりおらず、中高年女性の多くは肥満に悩まされていることが明らかだった。

サウジでは、肥満が男性よりも女性の間でより深刻であることを報告する研究も発表されている。サウジ保健省が支援する研究グループが2013年にサウジで15歳以上のサウジ人1万人以上の男女を対象に行った調査によると、対象者全体の28.7%が肥満（BMI値が30以上）であることが明らかになった。男女別では、男性が24.1%、女性が33.5%であった。太り過ぎ（Overweight, BMI値25～29.9）に分類される女性28%を加えれば、61.5%の女性が太り過ぎまたは肥満に悩んでいることになる。論文では、この原因として、野菜や果物の摂取量が少ないことに加えて、運動不足あるいはほとんど運動をしないことを指摘している。男性の46%が運動不足であるのに対して、女性の75.1%が運動不足あるいはほとんど運動をしない。また肥満と診断された女性のうち、45.8%は小学校かそれ以下の教育しか受けていないことも明らかになった⁽⁷⁾。

肥満によって糖尿病が引き起こされるケースは多いが、糖尿病患者が増えれば、国家の医療支出にも影響する。サウジにおける糖尿病の経済的費用を分析した論文によれば、サウジ保健省の予算は1992年から2010年までの18年間で27億ドルから94億ドルにまで膨れ上がった。国家予算に占める保健省予算割合はこの期間に5.2%から6.5%へと上昇し、一人当たりの支出額に換算すれば162ドルから345ドルへと増大している。この期間に糖尿病治療に配分された予算は1億4,500万ドルから8億7,400万ドルへと増加しており、2010年には保健省の予算の9.3%を費やしたことになる。このまま糖尿病患者が増加すれば、2020年には保健省の予算の18%以上が糖尿病治療に配分される必要があると試算されている⁽⁸⁾。女性のスポーツジム承認は、このような経済的リスクにも後押しされたものと思われる。

サウジはこれまで、女性のスポーツを禁じてきたことで国際人権組織ヒューマン・ライツ・ウォッチから非難を浴びてきた。2012年にはじめて2人の女性選手をサウジ代表としてオリンピックに送り出したが、この際にも当初、宗教界が拒否したことでオリンピック委員会から非難されていた。女性の権利が人権の重要な構成要素とみなされる国際社会の「ジェンダー・レジーム」の潮流において、サウジが女性を対象にスポーツを振興すること

(7) Memish ZA, El Bcheraoui C, Tuffaha M, Robinson M, Daoud F, Jaber S, et al. "Obesity and Associated Factors — Kingdom of Saudi Arabia", 2013. *Preventing Chronic Disease*. 2014 ; 11 : 140236.

(8) Alhowaish, Abdulkarim. "Economic Costs of Diabetes in Saudi Arabia", *Journal of Family and Community Medicine*. 2013 Jan-Apr ; 20 (1) : 1-7.

は、これらの国際的な要請に応じることにつながる。だが、より興味深いことは、サウジ社会において、これまで女性に付与されてきた肉体的に弱いイメージが中長期的に変化する可能性のほうだろう。たとえばサウジでは、男性の同伴者を伴わない旅行には、男性後見人の許可が必要とされる。この背景には、女性は肉体的に男性よりも弱いという前提がある。だが国際的に活躍するエリート女性たちの間では、旅行許可はすでに形骸化している。女性の間でスポーツが盛んになり、女性の肉体的な弱さのイメージに総体的な変化が起これば、旅行許可のみならず、男女間の権力関係に変化が起きるかもしれない。

中低所得層支援で不満は解消できるか

補助金の削減や付加価値税の導入と同時に国内での消費を刺激する「ビジョン2030」の施策は、国民の可処分所得を減じる効果を有することは明らかである。そこでサウジ政府は、公共料金の値上げの前に、中下層向けの経済支援の見直しも開始した。「国民のアカウント」は、世帯収入や子どもの数を把握することによって、世帯ごとに配分されてきたこれまでの手当を見直すことを目的としている。総額250億リヤルを投じて実施されるこのプログラムでは、子どもの数が6人の場合、月額の世界帯収入が20,160リヤル未満（約60万円）の世界帯が手当の支給対象となるのだが、月額の世界帯収入が8,699リヤル（約29万円）以下の低所得者層にはより手厚い手当を配分し、他方で中所得者層への手当は減額することが決定した。2月から申請受付を開始し、6月から手当の配給が開始される予定となっており、83万世帯、250万人が対象となる予定である⁽⁹⁾。

地方自治評議会も、低所得者層の居住地により配慮しているようである。リヤドの地方自治評議会の会議に参加すると、低所得者層が居住する地区の生活道路の排水システムの整備について話し合われていた。問題となっている地区では、道路の水はけが悪く、そのため異臭による健康被害を訴える人もいるという。議員たちは、至急、問題解決に取り組むよう指示を出していた。

サウジ政府は、財政削減と消費刺激、そして中下層支援をセットで実施することで、財政危機を回避しつつ、なおかつ貧困層の不満を未然に押さえ込もうとしている。だが、経済的目的のために、社会的・文化的規範が急速に転換されていくことへの懸念はすでに顕在化し始めている。ジェッダのコミックコンの終了後、男女が音楽に合わせて踊ったという噂が立ち、コミックコンは娯楽ではなく罪だといった非難のツイッターが数多く寄せられた。なかにはイエメンの前線で戦う兵士に言及して、娯楽行事が盛んになることに不快感を示す声もあった。

文化・娯楽活動は、消費刺激に加えて、娯楽の少ない国民の不満の解消のために始まっ

(9) <http://www.thaqfny.com> を参照した（最終閲覧日：2017年3月7日）

た。だが、閉塞感を打破するための施策は、一部の人びとには急速で大幅な価値観の転換を迫るものとなったようである。これまで国家が推進してきた男女隔離は今、娯楽という限定的な分野ではあるが、大幅に緩和されようとしている。これまでに自らが構築してきた社会・文化規範を、部分的ながらも裏返しているかのように受け取られているのかもしれない。家族で外出させる試みも、「家族」の定義のあり方によっては、これまでの価値観を大きく変更させるものとなるだろう。サウジでは、近代化や都市化によって核家族化も進展したものの、同性の拡大家族の団結力も維持されているからだ。性急に経済的な必要性に訴えて変革を求めれば、閉塞感を打破するための試みのはずが、今度は別の閉塞感を生む原因となりかねない。サウジ政府は、ソーシャルメディアの動向にも細心の注意を払っているとされる。ソーシャルメディアに寄せられた意見や不満を踏まえた次の一步が注目される。

*本稿の内容は執筆者の個人的見解であり、中東協力センターとしての見解でないことをお断りします。